

ササ葺き集落景観の変遷とその継承に関する研究

京都府宮津市上世屋地区を事例として一

小川菜穂子

キーワード: ササ葺き民家, 集落景観, 継承

1. 研究の背景と目的

里山の保全を考える上では、そこにすむ人々の暮らしのサイクルの中で景観が維持されてきた仕組みや、その背景を具体的に明らかにするアプローチが重要である。特にここ数年は、社会・文化的な観点から、里山の集落景観の形成過程や、土地利用形態など、人と里山のかかわりの変化に注目した研究がなされ始めている。中でも、かやぶき集落のような伝統的建築様式の景観は、地域の歴史・伝統・文化を体現しており、地域資源と人間とのかかわりを考える上で重要である。本研究では、ササ葺き民家が残る農村集落を対象として、人間生活の変化と共に、ササ葺き集落の景観がどのように変遷してきたかを定量的、定性的に把握し、ササ葺き集落景観を継承していく上での問題点を整理し、今後の維持・管理の方法を模索することを目的とした。

2. 調査対象地と研究方法

調査地は、京都府宮津市上世屋地区である。上世屋地区には、現在では希少なものとなりつつあるササ葺き民家(チマキザサを用いる)が、表面にトタンを被せてはいるものの、全戸数の60%という非常に高い割合で現存する。上世屋における集落景観の変遷を把握し、ササ葺き民家の減少過程とその要因を抽出するために、写真、地図の判読や文献調査、および上世屋住民に対する聞き取りをおこなった。質問項目は、集落内でのササ葺き屋根の維持・管理方法から、ササ葺き屋根をやめた理由、ササ葺きに対する思い等についてである。さらに、かやぶき屋根が維持されてきた事例を、民家単位(上世屋近郊のササ葺き民家5軒)、集落単位(京都府北桑田郡美山町北地区)でとりあげ、現地調査・聞き取りおよび文献調査により、屋根の維持を可能にした要因、維持・管理の現状と問題点について分析した。また、上世屋およびその近郊の3地点でカヤ刈り試験を行い、かやぶき屋根を維持する上で必要となるカヤ場面積や労力等について試算した。

3. 結果と考察

上世屋では、集落内での相互扶助(手間貸し)によりササ葺き民家の維持・管理が行われていた。集落景

観の変遷は、ササ葺き民家の動態やそれを取り巻く地域社会の変化に応じて、ササ葺き民家が比較的安定して存在しえた戦後～1960年(1期)、ササ葺きが激減した1960～1970年(2期)、リゾート開発が進みササ葺きの実習棟が復元された1970～1980年(3期)、里山保全が重要視され始める1990～現在(4期)の4つに分けられた。第2期のササ葺き民家の減少要因(図1)としては、農林業の不振や豪雪により過疎化・高齢化が急激に進行し、手間貸しが成立しなくなったこと、薪炭材利用の減少や拡大造林により伐採跡地などササの生育適地が減少し、ササの質・量ともに低減したこと、火災への不安等が挙げられる。聞き取りおよびカヤ刈り試験の結果から、上世屋での平均的な大きさのササ葺き民家1軒で、屋根の半分を葺きかえるためには、1000束(1束=10kg)のカヤ(カヤ場面積は1ha前後)が必要であると試算された。またササ葺き民家5例においては、代々受け継いできたかやぶき屋根に対する強い愛着、こだわり、屋根葺き職人・カヤの刈り手の存在等が屋根の継承を可能にしていた。また美山町では、地域住民によるかやぶき集落の積極的な保全活動と行政の支援策がうまく結びつき、集落景観の継承が地域活性化につながっていた。上世屋のササ葺き集落景観を継承していくためには、こうした事例に学び、住民、行政、地区外住民が維持・管理作業の役割分担を継続的に行い、利活用していく体制づくりが必要となる。

図1: ササ葺き民家の減少要因